

教員氏名：櫻田 涼子（現代コミュニケーション学科／准教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

育英短期大学現代コミュニケーション学科に所属し、キャリア支援を目的とする学科必修科目「キャリアプランニングⅡ」「キャリアプランニングⅢ」を担当している他、ビューティ・ブライダルコースの必修科目「ブライダルビジネス」、選択科目「ブライダルマネジメント」、基礎科目「異文化と多様性の理解（国際文化論）」などを担当している。キャリアプランニング科目では、自己理解、職業理解、履歴書作成、自己PR、志望動機、面接、ビジネスマナー、SPI対策など、就職活動に直接関わる知識と技能を扱っている。ただし、就職活動の手続きや技法を教えるだけでなく、学生がアルバイト、家庭生活、友人関係、学外活動など、これまでの経験を振り返り、それらを意味づけ、他者に伝わる言葉へと再構成する家庭を重視している。短期大学の限られた在学期間のなかで、学生が自らの経験と将来のつながりを見だせるよう支援することがキャリア教育における主要な責任となる。

1年次ゼミでは大学教育の基盤となるアカデミック・スキルの修得を目的として、文章や映像作品を批判的に読み解き、問いを立て、他者と議論し、自らの考えを文章にまとめる活動を行っている。2年次ゼミでは、学生生活の集大成として卒業研究に取り組む学生に対し、テーマ設定、資料収集、文献購読、調査、分析、論文構成、アカデミック・ライティングの指導を行っている。

また、慶應義塾大学文学部では非常勤講師として、専門分野である文化人類学の講義科目および文献研究科目を担当している。これまでに、筑波大学、横浜市立大学、埼玉県立大学、南山大学、東洋大学、茨城キリスト教大学、獨協医科大学において、文化人類学、東南アジア研究、家族・親族研究、異文化理解などに関する科目を担当してきた。

現在の主な担当科目一覧		
育英短期大学	現代コミュニケーション学科	キャリアプランニングⅡ・Ⅲ、ブライダルビジネス、ブライダルコーディネート、異文化と多様性の理解（国際文化論（異文化理解））、インターンシップ、基礎研究Ⅰ・Ⅱ、卒業研究Ⅰ・Ⅱ、海外研修など
慶應義塾大学	文学部	文化人類学特殊Ⅸ、社会学文献研究

2. 教育の理念（なぜやっているか）

専門分野との関連性 文化人類学を専門とし、長年にわたりマレーシア華人社会を対象として、家族・親族関係、女性の就労と子育て、世代間ケア、食文化、都市生活などについて研究してきた。一見すると、これらの研究テーマと、短期大学におけるキャリア教育やブライダル教育との間には直接的な関連が少ないようにみえる。しかし、文化人類学の重要な特質は、当然視されている制度や価値観を相対化し、人びとが異なる社会的・文化的条件のもとで、いかに生活上の選択を行なっているのかを具体的に理解する点にある。この視点は、学生のキャリア形成や家族観、結婚観、異文化理解を考えるうえでも有効である。たとえば、華人女性の就労と子育てに関する研究（添付資料 1）では、女性が結婚、出産、育児、就労を必ずしも一つの標準的な順序に沿って経験するわけではなく、親族関係や居住形態、越境的な移動、世代間の支援を組み合わせながら生活を形成していることを明らかにしてきた。この知見を、日本の女子短期大学生が直面するキャリア選択の問題と関連づけることで、学校卒業、就職、結婚、出産という単線的な「標準的ライフコース」を前提としないキャリア教育の必要性が明確になった。この問題は、短期大学における女子学生のキャリア教育と自己実現をめぐる研究へと発展し、国際学会での研究報告、および研究論文にもつながっている（添付資料 2・3）。

ブライダル関連科目においても、東アジアおよび東南アジアにおける婚姻、親族関係、贈与、儀礼についてのフィールドワークの知見を授業に取り入れている。日本のブライダル教育では、欧米型の結婚式やホテル・式場で行われる婚礼実務が中心となることが多い。それに対し、婚姻を家族・親族関係の再編、地域社会との関係、宗教実践、食文化、贈与交換などを含む社会的・文化的現象として捉えることにより、学生は結婚式を単なる商品や演出としてではなく、多様な人間関係が交差する場として理解することができる。

少子化や未婚化に伴い国内のブライダル市場が縮小する一方、日本に居住する外国人やインバウンド旅行者など、多様な文化的背景をもつ顧客への対応は今後ますます重要になる。欧米の婚礼文化だけでなく、アジア圏を中心とする婚礼儀礼や家族観について実践的に学ぶ機会を提供することは、東アジア・東南アジアを専門とする文化人類学者として、ブライダル教育に寄与できる独自の役割である。

学生の学習に対する理念 教育において重視しているのは、学生が知識を受動的に受け取るだけでなく、自ら問いを立て、自分の経験や社会の問題と結びつけて考え、それを他者に伝えられるようになることである。

文化人類学を学問的基盤として、「異文化と多様性の理解（国際文化論）」などの科目を担当しているため、授業では文化、社会、アイデンティティ、ジェンダー、家族、身体、グローバル化といった抽象度の高い概念を扱う。こうした議論は、学生にとって難解に感じられることがある。そのため、テレビコマーシャル、広告写真、音楽、文学作品、映画、身近な商品、食事、結婚式、観光、SNS 上の表現、フィールドワークで撮影した写真や動画などを用い、具体的な事例から抽象的な概念へ、また概念から別の具体的事例へと往還しながら理解できるよう工夫している。ただし、わかりやすい事例を紹介するだけでは、異文化を珍しいものとして消費する態度や、「国によって文化が違う」という単純な理解にとどまる危険がある。具体的な事例を入口としながら、そこに働く権力関係、歴史的背景、社会制度、ジェンダーや階層の差異について考え、最終的には学生自身の生活や価値観を問い直すところまで学びを深めることを目指している。

キャリア教育においても、就職活動に必要な「正解」を教えるのではなく、学生一人ひとりが自分の経験を振り返り、何を大切に働き、生活したいのかを考える過程を重視する。学生がすでにもっている経験を、単なる出来事としてではなく、自分の強み、関心、困難への対応、他者との関係として捉え直すことによって、自己理解と自己表現につなげる教育を行いたいと考えている。

社会における大学教育の位置付け 短期大学は、専門的・実践的な教育を通して、地域社会や産業を支える人材、とりわけ多くの女性を社会に送り出してきた高等教育機関である。修業年限が短いからこそ、資格取得や職業技能の修得だけでなく、学生が自ら考え、選択し、その選択を必要に応じて修正していく力を身につけることが重要である。

現在の学生は、雇用の不安定化、物価上昇、少子高齢化、家族形態の変化、デジタル化、生成 AI の普及など、将来の見通しを立てにくい社会を生活している。こうした社会では、在学中に学んだ特定の知識や技能だけで生涯を乗り切ることは難しい。自ら問いを立て、情報を吟味し、他者と協働しながら、経験を振り返って学び直す力が必要になる。

短期大学における教養教育とキャリア教育は、就職という直近の目標を支援すると同時

に、卒業後も学び続け、自律的に生活するための基盤を形成するものである。学生が社会の変化に受動的に適応するだけでなく、自らの生活を構想し、よりよい選択を行うための教育を実践することが、短期大学教員としての責任であると考えている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

具体的な教育上の実践や教材の工夫 学生の理解を支え、主体的な学びを促進するため、主に以下の取り組みを行っている。

- 1) **多様な学習特性に対応した授業資料** 学生によって、理解しやすい情報の提示方法は異なる。図表、写真、動画など視覚的な情報から理解を深める学生がいる一方で、文章を読み、論理の流れを確認することによって理解する学生もいる。そのため、講義では、写真や図表を中心としたスライド資料と、授業内容を文章として整理したレジュメの双方を準備している。スライドは授業中の説明を視覚的に補助する役割をもち、レジュメは授業の論点や議論の流れを文章として確認できるように構成している。レジュメは単なるスライドの縮刷版ではなく、授業に出席できなかった学生も内容をたどることができ、授業後に読み返して理解を深められる資料となるよう作成している。
- 2) **段階的な課題設定と学習経験の蓄積** 学生が課題に対する苦手意識を抱えたまま、突然難度の高い活動に取り組むことがないように、基礎的な課題から応用的な課題へと段階的に進む構成を重視している。たとえば SPI 演習では、初回から難問を課すのではなく、まず「解ける」「理解できる」という経験を積ませ、その後、出題形式を増やし、徐々に難度を上げている。基礎問題に正答できた経験は、苦手意識の軽減と学習への自信につながる。その一方で、簡単な問題だけで終わらないよう、授業の進行に応じて問題形式を組み替え、実際の就職試験に近い総合的な問題へと発展させている。レポートや卒業研究においても、テーマ設定、資料探索、要約、引用、分析、構成、執筆を一度に求めるのではなく、作業を小さな段階に分け、各段階で確認と修正を行う方式を採用している。
- 3) **フィードバックの実施** プレゼンテーション、レポート、履歴書、自己 PR、志望動機など、評価対象となる課題については、可能な限り具体的なフィードバックを行っている。フィードバックでは、不十分な点を指摘するだけでなく、課題のなかで

適切にできている点を明示し、次の課題で何を改善すればよいのかを学生が理解できるようにしている。学生が評価結果を単なる点数として受け取るのではなく、自らの学習過程を振り返り、次の行動につなげることが重要である。キャリア教育では、学生が書いた自己PRや志望動機を教員が完成させるのではなく、本人の経験や言葉を残しながら、読み手に伝わる構成へと修正することを重視している。対話を通して、「なぜその経験が印象に残ったのか」「どのような工夫をしたのか」「そこから何を学んだのか」を問い直すことにより、学生自身による経験の意味づけを支援している。

- 4) **発言と質問をしやすい環境の整備** 授業では、内容理解の確認や振り返りを目的としてリアクションペーパーを活用している。また、成績評価の対象としない任意のコメント欄を設け、授業内容について確認したいこと、疑問に感じたこと、自分の経験と関連して考えたことなどを自由に記述できるようにしている。評価に直接結びつかないため提出しない学生もいるが、教室内で発言することが難しい学生や、授業後に考えがまとまる学生にとって、重要な発言の機会となっている。寄せられた質問や疑問は、個人が特定されない形で次回授業の冒頭に取り上げ、授業全体へのフィードバックとして共有している。学生のコメントを授業内で取り上げることは、教員から学生への一方的な知識伝達を避け、学生の関心や理解の状況に応じて授業を調整することにもつながっている。
- 5) **学生自身の経験を教材とする教育** キャリア教育では、学生が経験を「もっていない」のではなく、自らの経験を学びや能力として認識し、言語化する機会が不足していると考えている。そのため、アルバイト、家庭内での役割、友人との関係、趣味、学校行事、失敗した経験などを振り返り、そこに含まれる判断、工夫、協働、葛藤、成長を言葉にする活動を取り入れている。この方法では、華々しい成果や特別な経験だけを評価するのではなく、日常的な経験のなかにある学びを発見することを重視する。学生が自分の経験を振り返り、他者に伝え、その反応を受けて再び捉え直す過程は、自己理解だけでなく、他者理解やコミュニケーション能力の形成にもつながる。
- 6) **フィールドワークを取り入れた学習** 文化人類学の教育では、教室内で知識を学ぶだけでなく、実際に歩き、見て、聞き、記録する経験を重視している。身近な地域

の店舗、食文化、観光地、広告、公共空間などを対象として観察を行い、フィールドノートを作成する活動を授業やゼミに取り入れている。異文化理解は、海外へ行くことによってのみ実現するものではない。日常生活のなかにある、これまで見過ごしてきた差異や関係性に気づくことも、重要な異文化理解である。身近な場所を「知っている場所」として済ませず、問いをもって見直すことにより、学生が観察、記録、分析する力を身につけられるようにしている。

- 7) **独自教材の作成** ブライダル関連科目では、婚礼実務だけでなく、コミュニケーション、家族関係、異文化理解を扱う適切な教材が国内では限られていた。そのため、学科およびコースの特色に合わせ、コミュニケーションの視点からブライダルを学ぶテキスト『ブライダル・コミュニケーション』を共同で作成した（添付資料 4）。同書では、結婚式場における接客や打ち合わせだけでなく、顧客との関係構築、家族間の調整、異なる価値観への対応などを取り上げている。また、卒業後にブライダル企業へ就職した学生の経験や声を盛り込み、学習内容と実際の職業生活との接続が理解できる構成とした。授業で使用した学生からも、具体的で理解しやすいとの評価を得ている。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

学生の学習成果と学生による評価 **教養教育における学習成果：**教養科目の成果は、資格試験の合格や技能の獲得のように、短期間で明確な数値として示すことが難しい。しかし、教養教育は、学生が社会に出た後も物事を考え、学び続けるための概念や視点を形成するものであり、長期的な意義をもつ。2023 年度後期に開講した「コミュニケーション論Ⅱ」の授業評価アンケートでは、自由記述欄に次のような意見が寄せられた。「多様性について考える授業がとても興味深く、これから社会人として生活していく上で役立てたいと感じた」「今後のためになることをたくさん学べました」「必修で取らなければ学ぶことのできなかった内容を学べて、知識や物事に対する理解を深めることができました」これらの記述から、学生が授業内容を単なる知識として受け取るのではなく、卒業後の社会生活や他者との関係を考えるための基盤として捉えていたことがわかる。同科目は 2 年次後期の必修科目であり、多くの学生にとって卒業と社会人生活への移行を目前にした時期に開講される。20 歳前後で短期大学を卒業し、社会に出る学生に対して、多様性、コミュニケーシ

ョン、社会規範、自律性について考える機会を提供することは、高等教育機関として重要な役割を果たしている。

キャリア教育における学習成果：キャリア科目では、履歴書、自己PR、志望動機、面接などに対する学生の苦手意識が、繰り返しの練習とフィードバックによって軽減される様子が確認できる。学生が当初は「書くことがない」と捉えていたアルバイトや日常生活の経験について、対話と振り返りを重ねることで、自分の強みや行動特性として説明できるようになる例もみられる。また、SPI 演習では、初期段階で比較的取り組みやすい問題を設定したことにより、「思っていたよりできる」「苦手だと思っていたが解き方がわかった」といった反応がみられた。その後、段階的に難度を上げることによって、学習への自信を維持しながら、より実践的な問題へ取り組むことが可能となった。これらは、単に就職試験の技法を修得したという成果だけではなく、学生が自らの学習可能性を認識し、困難な課題にも段階を踏んで取り組めるようになるという点で意義がある。

教材開発と教育実践の相互作用：独自テキストの作成、授業資料の蓄積、学生のリアクションペーパーの分析を通して、教育実践そのものを継続的に見直すことが可能となった。学生から寄せられる質問や理解しにくかった点を確認することにより、次年度の授業では説明や事例を追加し、レジュメの構成を改善している。また、キャリア教育の実践を研究対象として捉え直すことにより、教育と研究の相互作用も生まれている。女子短期大学生が、自己実現、就職、家族形成、経済的自立をどのように理解しているのかを検討することは、授業改善に資するだけでなく、現代日本の若年女性のキャリア形成を考察する研究へと発展している。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

短期的な目標 短期的には、キャリア教育において、学生の日常的な経験を振り返り、意味づけ、他者に伝わる言葉へと再構成する活動を体系化したい。履歴書や面接の直前になって自己分析を行うのではなく、1年次から経験を記録し、定期的に振り返る仕組みを整えることで、2年間の学生生活とキャリア形成を連続したものとして捉えられるようにする。ゼミ教育では、文化人類学の学問的特徴であるフィールドワークとフィールドノート

を取り入れた、継続的な学習活動を充実させたい。コロナ禍以降の行動範囲の縮小や物価高の影響もあり、学生の学びは、ともすればオンライン上の情報や手近な資料のみで完結しがちである。しかし、異文化理解は海外留学や海外研修によってのみ達成されるものではない。身近な地域を歩き、人や物、空間を観察し、これまで気づかなかった暮らしの差異を発見することも重要な学びである。学生とともに歩き、見て、聞き、味わい、記録し、考える活動を通して、一つの目的地や正解に最短距離で到達するだけでなく、多様な経路をたどりながら問いを深める学習を実現したい。あわせて、生成 AI を含むデジタル技術について、単なる禁止または無批判な利用のいずれにも偏らず、情報の出典確認、文章作成過程の可視化、引用と著作権、本人による思考との区別を含む、適切な活用方法を指導していきたい。ゼミ教育では、文化人類学の学問的特徴であるフィールドワークとフィールドノートを取り入れた、継続的な学習活動を充実させたい。コロナ禍以降の行動範囲の縮小や物価高の影響もあり、学生の学びは、ともすればオンライン上の情報や手近な資料のみで完結しがちである。しかし、異文化理解は海外留学や海外研修によってのみ達成されるものではない。身近な地域を歩き、人や物、空間を観察し、これまで気づかなかった暮らしの差異を発見することも重要な学びである。学生とともに歩き、見て、聞き、味わい、記録し、考える活動を通して、一つの目的地や正解に最短距離で到達するだけでなく、多様な経路をたどりながら問いを深める学習を実現したい。あわせて、生成 AI を含むデジタル技術について、単なる禁止または無批判な利用のいずれにも偏らず、情報の出典確認、文章作成過程の可視化、引用と著作権、本人による思考との区別を含む、適切な活用方法を指導していきたい。

中期的な目標 ブライダル教育については、既刊の『ブライダル・コミュニケーション』を基礎としながら、学生や卒業生との共同作業を通じて内容を更新した教材を作成したい。婚礼実務や接客技術に加え、家族の多様化、ジェンダー、異文化間コミュニケーション、外国人顧客への対応、結婚式を行わない選択など、現在のブライダル業界が直面する課題を取り入れる必要がある。キャリア教育については、日本の短期大学における女子学生のキャリア認識を、他国・地域の女子教育や若年女性のキャリア形成と比較する共同研究へと発展させたい。特に、就職、結婚、家族形成、ケア、経済的自立、自己実現がどのような関係として学生に理解されているのかを明らかにし、単線的なライフコースを前提とし

ないキャリア教育の方法を検討する。また、授業評価アンケート、リアクションペーパー、課題成果物、学生への聞き取りなどを組み合わせ、教育実践の成果をより具体的に検証できる仕組みを整えたい。学生の満足度だけでなく、授業を通して何を理解し、どのような考え方や行動の変化が生じたのかを把握し、教育内容と方法の改善につなげていく。

長期的な目標 長期的には、文化人類学、キャリア教育、ブライダル教育という、これまで別個にみえた教育領域を、「他者の生き方を理解し、自らの生き方を構想する教育」として統合したい。文化人類学は、異なる社会の知識を学ぶだけの学問ではなく、自分たちが当然と考えている働き方、家族、結婚、成功、幸福などを問い直すための方法を提供する。キャリア教育もまた、就職先を決定するためだけの教育ではなく、社会や他者との関係のなかで、自らがどのように働き、暮らし、生きるのかを考える教育である。学生が、他者の異なる生活に関心をもち、自分自身の経験を丁寧に捉え直し、変化の大きい社会のなかで自ら問い、学び、選択し続けられるよう支援することを、今後の教育実践の中心に据えたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1. Ryoko Sakurada 2015 “Working in the City and Rearing Children in the Hometown: Women-centered Relationships of a Patriarchal Chinese Family in Peninsular Malaysia,” pp.123-138, Ijichi Noriko, Atsufumi Kato and Ryoko Sakurada (eds.), *Rethinking Representation of Asian Women: Changes, Continuity and Everyday Life*, Palgrave Macmillan.
2. Ryoko Sakurada 2024 “I am still trying to figure out what I want to do: Career Education and Self-actualization of Female Students at a Junior College in Japan”, oral presentation in The 13th International Convention of Asian Scholar's: Crossways of Knowledge, Airlangga University, Surabaya Indonesia.
3. 櫻田涼子「就職をめぐる戸惑い：短期大学女子学生のライフコースとキャリア教育の限界」『育英短期大学研究紀要』43：29-40.
4. 櫻田涼子・三浦哲也（編）2022 『ブライダル・コミュニケーション』育英短期大学現代コミュニケーション学科発行

（2026年6月30日現在）